

- ⑫ 元史文宗本紀、天曆元年十月の條を參照。
- ⑬ 民族第一卷第三號所載、白鳥博士「本邦の鷹匠起原説に就いて」を參照。
- ⑭ 岩波版蒲壽庚の事蹟八七頁參照。
- ⑮ 實に箭内博士はこの考の下に「軍國の事情急速を要する時に限り、乘驛者に付して之を佩ばしむるの故に、海青牌の名ありしなるべし」というた（滿鮮地理歴史研究報告第九所載、元朝牌符考、二八九頁）。尤も氏は次に「たゞ海青符は軍情急速の公事に限りて之を用ゆるによつて、その名を得しのみならず、牌符の面に海東青の圖形を刻せしこと、金虎符に虎形を刻せしが如くなりしならんと推測するも、果して然るや否や、未だ明證を得ず」ともいうた（蒙古史研究八八五頁）。
- ⑯ Yule, *ibid.* I. p. 351.
- ⑰ ウラヂミールツォフ氏に據ると八思巴文字で蒙古文を刻出した圓形の銅牌を柯劭忞博士が藏して居るとのことである（Владимирцов, Сравнительная грамматика монгольского письменного языка и халхаского наречия, стр. 35.）。單にこれだけの紹介では、それが如何なるものであるかは固より知り得ないが、蒙古文を刻した圓形の銅牌といふのは甚だ珍らしく感ぜられる。或はこゝに説くものと同種の牌札では無からうかとも思ふ。
- ⑱ Yule. 同上。Book of Ser Marco Polo 2nd edition, I. 320, 325-206.
- ⑲ 元朝牌符考二九二頁（蒙古史研究八八五—八八六頁）。
- ⑳ 元朝牌符考二九二頁（蒙古史研究八八五頁）。

補記

・余がこの稿を草し了つたのは昭和五年六月の末、將に再び露西亞に遊ぼうとして、行李匆忙を極むる際であつた。これが爲に本章イに記したポズドネーエフ氏のボゴミルスク縣出土の牌に關する論文は、石濱氏の所藏中に在ることを同氏から聞きな